

## バシユラールの科学哲学と科学批判

—— 科学哲学と芸術論の関係に向けて ——

橋 爪 恵 子

### 序

ガストン・バシユラールは一八八四年、フランスのブルゴーニュ地方に生まれた哲学者である。苗字の元となったバール＝シュール＝オーブという名の地に生まれた彼は、中等教育を終えた一九〇二年にコレージュで復習教員となる。その後、郵便局やコレージュで働く傍ら、時に戦争に動員されながらもほぼ独学で勉学を続け、科学哲学の教授資格を取得する。その後、科学哲学者としていくつかの著作を刊行した後、パリ大学に移り、初めて本格的に芸術論を展開し始める。科学哲学におけるバシユラールは、「認識論的断絶」といわれる独特の科学史観を展開し、芸術論では、精神分析理論や現象学を援用しつつ、後のイメージ批評に繋がる独特の論を打ち立てる。したがって彼は、科学と芸術という二つの領域を論じ、それぞれで興味深い思想を展開した特異な哲学者といえることができる。

元来、科学哲学者であったバシユラールがなぜ芸術の問題を論じたのか、彼にとって芸術とはどのようなものであり、それは科学といかなる関係にあるのか。これらの問題を考察するための予備的研究として本論文では、バシユラールの科学哲学と科学に対する批判という問題を論じる。なぜなら彼はベルクソンの科学批判に対し、共感を覚えつつ同時に反発する、

という二律背反的な態度をとり、この態度が一方で彼の科学哲学の主張を明確化し、他方で芸術を論じるきっかけとなったからである。本論文では芸術の問題を視野に入れつつ、一見独創的に見える彼の科学哲学が科学に対する批判を背景に成立していく過程を考察する。

## 第一節 バシユラルルの科学哲学の特徴

初めにバシユラルルの科学哲学全体の特徴を確認したい。すぐに思いつくのは、いわゆる「認識論的切断」といわれる議論とそれに連動した「実験に対する理論負荷性」の議論である。「認識論的切断」（時に「認識論的断絶」とも訳されることがある、フランス語では *rupture épistémologique*）はバシユラルルの科学哲学の主要な主張とみなされているにも関わらず、言葉としては実はそれほど頻出しない。そこで、この語の主な使われ方を確認しておこう。

しかし我々の観点を明らかにするために、我々の主張にとって最も不都合な事例、まさに経験論の領域からの実験の超越性の例を示そう。実際のところ、計器を用いた科学を自然な観察を用いた科学からの超越として定義付けるのに、この表現は大きさではないと思う。感覚的な認識と科学的認識の間には切断があるのだ。（太字は著者）（PN 10）  
ある元素の化学的性質を電氣的粒子の組成から説明することによって、現代科学は新たな認識論的切断を作り出した。（PN 61）

右の引用では、自然な観察と科学的認識の差異が、左の引用では元素の化学的性質に関する新旧の説明の差異が「切断」と名づけられている。すなわち右の引用では科学と非科学の差が、左の引用では科学内部の理論の差が「切断」として捉えら

れている。ただし「切断」と共に「超越性」という言葉でも事態が示されることから、この概念が一つの固定した名称と結びついているわけではないことが伺える（その他によく使われる名称として「障害」がある）。多くの名称があるにもかかわらず「認識論的切断」の語が流布するようになったのはアルチュセールの『資本論を読む』の影響が大きいが、様々な名称の中でもアルチュセールが「切断」の語を選んだのは、おそらくこの名称が概念の内実をよく示しているからである。「認識論的切断」とは観察と科学的認識の間であれ、新旧の科学理論の間であれ、両者の差異を示すだけでなく、連続的な変化を批判するものであった。それまでの科学史は科学の発展を連続したものとして論じる。理論の萌芽が最初にあり、そこから徐々に理論が成長していくと考えるのが通例である。たとえば古代ギリシアの理論の中に原子論の萌芽を見つけたり、錬金術の中に化学の誕生をみたりする論が典型である。このような連続的な科学史をバシユラールは批判する。たとえ同じ「原子」という単語を使っているとしても、内実は古代ギリシアと現代で大きく異なっていること、そこに安易に「現代科学との共通点」を見ることは、科学の歴史をゆがめてしまうことを指摘する。歴史の連続性を否定するこの態度は「認識論的切断」の概念を使ったアルチュセールの議論でも確認できる<sup>(1)</sup>。そしてこの「認識論的切断」の概念は、クーンの科学革命の概念やコイレの科学哲学を先取りするものとしてバシユラールの主要な主張とみなされるようになったのである<sup>(2)</sup>。

認識論的切断を主張するためのもう一つ重要な論点が、実験に対する理論負荷性である。これは、実験において仮説を立てる行為が観察に及ぼす影響を指摘するものである。人間は観察しようと思ったものしか観察できず、予め理論に即して準備することによって初めて実験が可能となる。したがって虚心想像の実験というのは虚構の産物であると主張する議論である。この議論が認識論的切断にとって重要なのは、過去の科学と現代の科学で、同じ対象をもつ実験の類似性を否定するからである。自然科学においては、現代に理論化された現象であっても、過去に観察された可能性がある。ある物質をただ観察すればその実態に迫ったことになるとすれば、過去と現代で同じような議論が成立したことになる。先の原子の例でいえば、原子の活動を古代のギリシア人が見たり、言及したりすることを、直ちに原子論の萌芽とみなす見方である。

しかしバシユラールはこれに反論する。そして十分な理論的背景が成立しない場合には、たとえ現象を見ていたとしても十分に理解していたとはいえないことを主張する。これが実験に対する理論負荷性の議論である。同様の議論は、クーンなどにも存在する。

但し、バシユラールの主張は細かく見ていくと、クーン、コイレの主張とは違いがある。それは彼の議論が依然として進歩史観的であることである。認識論的切断の議論が注目を浴びたのは、それが科学史の進歩史観に反対したからであった。過去の理論は現代の目からは、奇妙な点に注目し、奇妙な主張をしているように見えるかも知れない。しかし過去の文脈（パラダイム）に身をおくならば、その議論は現代と同じくらい筋が通っている。したがって過去の科学と現代の科学に優劣をつけることは出来ない、というのがクーンが繰り返し主張したことであった<sup>(3)</sup>。これに対してバシユラールは、次のように言う。

我々は、道德の進歩について、社会の進歩について、詩の進歩について、幸福の進歩については果てなく論じることが出来る。しかし全く議論の余地のない進歩もある。それは認識のヒエラルキーにおいて、特にその知的な面において判断された科学の進歩である。(PN 21)

「科学は進歩する」、とバシユラールは断言する。したがって過去の科学より現代の科学の方が優れている。科学は「永遠の真理」には到達できない、と彼はいうが、それでも科学は進歩する。ただそれは、これまで考えられてきたような「連続的」進歩ではなく「切断」を伴ったものである。これがバシユラールの主張であり、進歩史観に固執するその議論は古い考え方を引きずっているという印象を与えることもある。

## 第二節 科学を論じ続ける理由と時間論

以上、バシュアールの科学哲学の主要な主張を確認したが、このような理論がなぜ成立したかを理解するために、ここで新しい問題を一つ提起したいと思う。それはバシュアールがなぜ、科学哲学を論じ続けたか、ということである。バシュアールは一九三八年に芸術論『火の精神分析』を発表し、その後も続々と文学を中心とした芸術論を出版する。一見すると彼は、科学の問題から芸術の問題へと関心を移したように思われる。しかしバシュアールは、科学哲学を人間の本質と関わるものとして、生涯論じ続けていくのである。なぜ彼は、科学の問題を論じ続けたのか。その答えは晩年のバシュアールの言葉に表れている。

私は教育にたずさわりつつも、現代の科学的思考の哲学的価値を証明したいという思いから、本を執筆しなければならなかった。現代の科学的思考の優れた組織化は、私にとっては新しい知、哲学史家たちが引き似合いに出す硬直した合理主義から開放された知の、合理的整合性を保証するものである。(HPF 33)

バシュアールは、科学哲学論を執筆「しなければならぬ」と考えていた。それは科学的思考がもつ「哲学的価値を証明」するためである。逆にいうと彼は、科学のもつ価値が哲学の場で十分に認められていない、と考えていた。「哲学史家」たちは科学を「硬直した合理主義」におとしめてしまう。だからこそ彼等に科学の本当の価値を示すこと、それが科学を論じるモチベーションになっているのである。また右の引用文では、どのような戦略で科学の価値を主張しようとしたかが示されている。それはこれまで議論の俎上に載ることの少なかった現代科学に注目すること、とりわけその「優れた組織」を取り上げること、である。

なぜ現代科学を取り上げることが科学の価値を示すことにつながるのだろうか。科学が十分に認められない原因は、現代科学がこれまでにない新しい性質を示しているにもかかわらず、十分に科学に精通していない哲学者がそれを認識せず、これまでの科学と一まとまりに論じているためである、とバシュアールは考えていた。だからこそ新しい科学を論じ、これまでの科学批判で語られていたものとは反する性質を、科学自身がすでに持っていることを示さなくてはならない。実際バシュアールには『新しい科学的精神』、『現代物理学における空間の経験』など「新しい」や「現代」の語がついた著作が多くある。それは科学批判に反論するためには、そのような理論を取り上げることが有効だからなのである。

ではここで想定されている科学批判とはどのようなものであり、バシュアールはどのように反論したのだろうか。その問題をさらに詳しく考えるために、一九三二年の時間論『瞬間の直観』をとりあげよう。というのも時間に関する議論は、科学批判と密接に関連しているからである。バシュアールの時間論は時間の本質を「瞬間」として論じたものであるが、ベルクソンの時間論を批判した議論としても知られている。注目しなければならないのは、このベルクソンの議論が科学批判の性質を持っていることである。ベルクソンは時間の本質を持続として捉えたが、持続は具体的にどのようなものか、について次のように述べている。

さもなければ、それら（現在鳴っている振り子の音と、それに先行する振り子の音）の二つのイメージが互いに相手の中に含まれて、メロディーの楽音のように相互に浸透し合い、有機化し合って、数とはいささかの類似点も持たない、区別なき多数性、あるいは質的多数性とも呼ばれるべきものを形成するのを認めることになるだろう。こうなれば私は純粹持続のイメージを得ることになるだろう。（O 70）

ここでベルクソンは振り子の音やメロディーにたとえて持続を説明している。我々が振り子の音を聞いて眠くなる場合、あ

る特定の一言が我々を眠りに誘うわけではない。幾つかの音を聞いた結果、それら全体が眠さを感じさせる。それはメロディーの場合も同じである。楽音のどれか一つが魅力的なのではなく、メロディーは全体として魅力をもつ。これは持続のあり方に似ている、とベルクソンはいう。持続はメロディーや振り子の音と同様、全体として存在するものであり、分断不可能なもの、すなわち「質的」なものである。これと対比される量的なものは区別可能な多数性であり、その代表が「数」である。そして「数」は、科学の基礎となる。したがって持続を数と全く異なるもの、量的思考では捉えられないものとするならば、科学的な視点から持続が捉えられないことを意味している。

質的なものを論じる際の量的思考の不十分さは、持続について論じた『意識に直接与えられたものに関する試論』で一貫して主張される。例えばベルクソンは、内的感覚、すなわち痛覚や色の感覚を量として捉えることを否定する。痛みが徐々に大きくなっていくのは量的な変化ではなく、質的な差異である。また白っぽい白と黒っぽい白はそれ自体が異質の経験であって、白さの程度に還元されるものではない。さらにこの質と量の対立は、有名なゼノンのパラドックスへの反論にも表れている。ベルクソンが指摘したのは、アキレスの動きも亀の動きも運動であるのだから持続と同様に分割不可能だ、ということである。まず亀のいるところまでアキレスが進んで、というようにアキレスの動きを任意の箇所で分断してしまうことが、このパラドックスを生んでいる。運動も質的なものであり、量的な考え方で捉えることはできないのである。だからこそ彼は、次のようにいう。

ところでまさにこの理由からして、科学が時間および運動に働きかけるのは、初めに本質的で質的な要素を――時間からは持続を運動からは動性を――除去するという条件が満たされた場合だけである。(O 77)

時間からは「持続」、運動からは「動性」という「本質的」で「質的」なものを取り除かない限り、科学はそれらを論じら

れない。したがってベルクソンの時間論は、科学のもつ欠点を指摘しつつ「持続」の重要性を指摘したもの、と読み解くことができる。

この議論に反論したのがバシュアールの時間論であるならば、時間という問題を論じていても、科学という視点を無視することはできない。それではバシュアールはベルクソンをどのように批判したのだろうか。彼は次のようにいう。

彼（ベルクソン）自身の用語を使うことで批判点が明らかになるので、我々は直ちにこう言おう。ただ連続性を除いて、ベルクソン主義のほとんど全てを受け入れよう。あるいはもっと正確を期してこう言おう。我々の観点からすれば、連続性―あるいは数々の連続性―は心理現象の性質として示されることは可能であるが、完成された、堅固な、恒常的な性質として取り上げることが不可能である、と。(DD 78)

バシュアールは「連続性以外のベルクソンの理論を支持する」という。しかしこの言い方は、曖昧であるといわざるを得ないだろう。なぜなら、連続性をもつ時間、質としての時間である持続概念こそがベルクソン時間論の主眼だからであり、持続概念を批判し、それ以外を受け入れるというのはほとんど無意味といっても良いからである。しかしこの発言は、時間論の背景に科学をめぐる言説がある、と考えるならば理解に近づく。すなわちバシュアールもまた科学に対する批判、量的な認識では論じられないものが存在する、という言説に共感するものがあったのではないだろうか。それが「持続以外」は認める、という態度に表れているのではないだろうか。しかし持続を時間の本質とすることは出来なかった。なぜなら持続が時間の本質である、ということは科学が時間の本質を捉えていないばかりでなく、決定的な欠陥を抱えている、ということに繋がってしまうからである<sup>(4)</sup>。それは持続がなぜ時間の本質となり得ないか、という点に表れている。その理由を彼は次のように説明する。



實際、もし瞬間が虚偽の区切りであるならば、過去と未来は常に人為的に分けられることになり、それらを区別することはきわめて困難になるだろう。そうなると持続は、切り離すことの出来ない一つの統一の中で捕らえられねばならなくなる。そこからベルクソン哲学の結論が全て生じる。すなわち、行為の一つ一つの中に、もっともささやかな身振りの中にやりかけているものが完成したときの性格を把握し、開始の中に終結を、胚の躍動の中に存在とその生成の全てを把握することができるはずである。(II 18)

もし時間が持続という連続性を保持しているのなら、全ての結果は始まりに含まれており、過去と全く関係のない真の創造は不可能になる。この理由からバシュラールはベルクソンに反論した。すなわち時間の本質は何か、という問いの背後には創造はいつ可能になるか、という問いが隠れているのである。そしてバシュラールは、持続において創造は不可能であり、瞬間こそが創造性を可能にする主張する。

もっともこの議論はベルクソンの側に立つと納得がいかないだろう。なぜならベルクソンの持続とはまさしく創造を許容するような連続概念だからである。持続と創造が両立しないとしたら、それはベルクソンの持続概念を正しく捉えていることにならない。そのため両者の意見はただすれ違っているように見え、実際ベルクソンはバシュラールの論に不満を持っていた<sup>(5)</sup>。しかしバシュラールの側から考えると、別の点が見えてくる。ベルクソンの時間論はただ時間を論じているだけではない。それは数という量的なもの、任意の箇所で分断できるもので時間を捉えることの不十分さを指摘し、質的なもの、断ち切れない連続性の中に創造行為を探ろうとする主張である。しかしバシュラールにとって創造は量の世界になければならなかった。なぜならば科学は数を基礎とするからであり、彼にとって科学が創造性を持つことは、絶対に否定できないことだったからである。十七世紀の科学革命が、アリストテレス的質的世界を数に還元したことで多くの発見をしたといわれるように、連続して見える世界を分断し、量に還元して初めて見える世界がある。それは確かに質的な何かを取りこぼして

いるかもしれないが、そこにこそ質的世界にないものが生まれる可能性がある。だからこそ持続ではなく瞬間に、創造性を認めなくてはならなかったのであり、それこそが時間の本質でなければならなかったのである。

このように時間論での議論は、科学への批判でもあるベルクソンに対するバシュラールの反論という性質を持っていた。したがってこのような議論ののち、彼の科学哲学に変化が現れるのも納得できる。次にその点を確認しよう。

### 第三節 科学批判と科学哲学

まず、時間論以前の科学哲学がどのようなものであったかを、彼の処女作、一九二七年の『近似的認識試論』を取り上げて考察しよう。この著作の主題は科学的認識の発展の仕方である。科学的認識は常に「近似的」ではあるが、その精度をいかに高めていくことが出来るか、それを論じたこの著作で想定されている認識の発展は漸近的なものである。例えばバシュラールは次のようにいう。

こうした全ての理由から、感覚という源ではなく、流れの中において、反省と密接に組み合わせられたものとして認識を捉えるべきである。認識が意味を持つのはこの流れの中だけである。起点は幾何学的な点でしかなく、流れという生きた力を持たない。運動しつつある認識は、このように一種の連続的創造なのである。古いものが新しいものを説明し、これを同化する。逆に新しいものが古いものを強固にし、それを再組織化する。(EA 15)

科学的認識は一人の発見、すなわち「感覚的源泉」によって一挙に出来上がるのではなく、流れとして存在する。過去の理論が新しいものを理解させ、新しいものが過去の理論を強固にする。ここでバシュラールが述べている認識のプロセスはま

さに「流れの中」、連続的なプロセスである。「反省」にも言及があるが、過去を振り返るといふこの作業も、現代の視点から過去をとらえることで連続性を強固にする働きを担っているからこそ必要なのである。このように『近似的認識試論』は認識が向上していく過程の連続性を強調する。

また理論負荷性についても『近似的認識試論』の時点で明確な記述はない。この著作では数学を多様な自然を捉える「枠組み」とみなし、そこからこぼれる自然の多様さをすくい上げるために、枠組みを精緻にしていくことが求められている。そしてこの枠組みの変化が認識の向上に繋がる。枠にいれ、それを改善する、この対となる行為はパスカルの言葉を借りて「幾何の精神」と「繊細の精神」といわれる。ここで注目したいのは「繊細の精神」、すなわち枠組みには収まりきらない要素を発見し、枠組みを変更していく力である。『近似的認識試論』では「検証」がそれを担い、「検証」のもっとも一般的な形は実験である。実験をし、理論に合わない部分を発見し、理論を修正する、この繰り返しで科学的認識を進化させるプロセスである。したがって理論と実験の関係は、その連動性よりも実験が理論に異議を唱える能力の方に注目が集まっている。この議論は、実は実験の理論負荷性とは相性が悪い。なぜなら正しい実験は正しい仮説があって初めて可能となることを強調するならば、実験自体が仮説となる理論に異議を唱えることが可能な範囲は、大きく制限されるからである。仮説自体が大きく間違えれば、有効な実験を行うことは出来ない。それにもかかわらず、この時点では実験に理論を発展させる原動力を認めていた。すなわち『近似的認識試論』では仮説が及ぼす実験への影響をそれほど重要視していないのである。

この『近似的認識試論』を先の時間論と比べると、時間論にはこれまでの主張から変化する契機があるのに気づく。『近似的認識試論』で論じられていた認識の発展は、理論的な枠におさまらない質的な自然を発見し、枠組みを精緻にしていくことで可能になっていた。このプロセスにおいて量的枠組みは常に不十分なものの、改良されるべきものである。しかもこの認識が「近似的」といわれ、近似的認識の例として概算の場面が挙げられていることから分かるように、枠をはめて見えてくるものは、質的世界に元から存在していたものである。あまりに細かすぎる計測値を四捨五入することで計算がやりや

すくなるように、科学的認識によって見えてくるものは自然の中に存在しながら、多様性の中に埋もれていたものである。これに対して時間論では量的瞬間は創造に欠かせないだけでない。そこで生じるのはバシュラールの言葉で言えば「突然変異」的なもの、質的時間である持続には存在していなかったものである。ここに量的時間が持つ意味が、『近似的認識試論』と大きく変わっていることが確認できる。

またこの議論が時間の本質という論点でなされたことにも意味がある。時間論として論じることによって、連続した質と切断できる量の対立が、時間の捉え方、連続した持続と分断可能な瞬間の対立へとシフトしたからである。これはそのまま歴史の問題、特にバシュラールのような科学哲学者にとっては科学史の問題へと繋がる。連続した質を量として捉えることで新しい世界認識が可能となるように、時間が分断されたときに創造の契機が生じるならば、科学の歴史においても創造性は、歴史の分断と連動しなければならない。この主張はまさに、認識論的切断の議論である。

だからこそ時間論を経てバシュラールの科学哲学の強調点が変わる。それを示すものとして時間論を発表した後、一九四〇年の『否定の哲学 (*La philosophie du non*)』を取り上げよう。なぜならこの著作は、一九二七年から二、三年の間隔で出版された科学哲学書の最後を飾るものであり、彼の主張が出揃うとされる中心的著作の一つだからである。この著作も『近似的認識試論』同様、科学的認識の変化が主題となる。しかし焦点を当てられているのは、連続的な変化ではなく科学史において大きな転換を生み出した時期である。さらに科学の転換を生み出すのは、これまでの理論を疑い、根本から考え直す態度、書名にもなっている「non」と言う否定的な力である。この否定の力は歴史に断絶を作る。だからこそ、『否定の哲学』において「認識論的切断」が言及される。このように一見、似た主題を扱いながら、時間論以前の『近似的認識試論』と時間論以後の『否定の哲学』の間には無視できない変化があるのである。

さらに実験の理論負荷性も指摘されるようになる。それが表れているのは、『近似的認識試論』でも論じられていた、科学を發展させる原動力に関する議論である。理論は自然に完全には論じ切れないからこそ、何度もそれまでの理論に「non」

といわなければならない。この否定の力が科学を進歩させる。ここで注目しなくてはいけないのは、この否定は『近似的認識試論』のように実験が行うものではなく、理論の側からの働きかけで生じることである。例えばバシュラールは次のようにいう。

科学的に考えるということは、理論と実践の、数学と実験の中間的な認識論的領野に身をおくことである。・・・またこの序章では、我々の哲学的な立場と目的をできるだけ明確に示したいと思うので、我々の意見では二つの形而上学的发展方向の一方が重視されねばならないことを付け加える必要がある。それは合理論から実験にいたる方向である。我々が現代自然科学の哲学の特徴として示そうとしているのは、この認識論的な運動なのである。(p.256)

科学は理論と実験を媒介する領域である。しかし重要なのは、実験から理論へのフィードバックではなく、合理論（理論の側）から実験へといったる方向である。自然を見つめて量的認識の不十分さを発見するのではなく、量的な考え方自体を理論の側から見直すことが更なる発展に繋がる。これは実験の理論負荷性を論じるのに重要な変化である。

このように考察するときバシュラールの科学哲学は、時間論という科学批判を通して、その主要な主張が明確化していることが分かる。また科学哲学が科学批判への応答であった、と考えると彼の科学哲学の欠点ともいわれる論点、科学に対する進歩史的な見かたがなぜ存在したかも理解できるのではないだろうか。現代の科学がこれまでの科学批判に当てはまらないと主張するためには、これまでの科学と現代科学の差異を強調し、そこに大きな分かれ目、すなわち切断を指摘する必要がある。さらに現代科学の性質が一過性のものでなく、科学の真の性質が表れたものであると主張するためには過去よりも現代において科学的性質が十全に発揮されていなければならない。そうでなければ現代科学が批判に当てはまらないことを指摘しただけで、科学全体の批判に答えたことにならないからである。そのために不十分な科学から十全な科学へとい

う進歩・発展が必要であり、だからこそバシユラルは、科学の切斷と同時に科学の進歩も主張しなくてはならなかったのである。

## 結語

本稿ではバシユラルの科学哲学が、科学批判、およびそれと関連した時間論との密接な関係の中でいかに成立していたかを考察した。バシユラルは芸術論以降も科学を論じ続けたが、その理由は、真の科学は従来批判の対象となっていたものとは違う性質を持っていることを示すためであった。彼が当時の最新の理論に着目したのも、そのためと解することができる。また議論の内容も科学批判に答える形で明確になっていることを確認した。とくにベルクソンに反論した時間論は、「認識論的切斷」と「実験の理論負荷性」という主張の確立と密接に関連している。

そして科学批判という視点は、科学哲学だけにとどまるものではない。科学と平行して論じられる芸術にも、科学への批判が関係する。というのも、芸術を論じるようになった契機について、バシユラル自身が次のようなエピソードを語っているからである。

科学の実践と教育から哲学に移ったとき、期待したほど完全に幸福な気がしなかった。自分の不満足の原因をむなしく探し求めていたが、ある日、ディジョン大学の演習の気楽な雰囲気の中で、一人の学生が私の『消毒済みの世界』について語るのを耳にした。それは私にとっては啓示であった。それが原因だったのだ。人間は殺菌された世界の中では幸福でありえない。私はその世界に出来るだけ速やかに細菌をはびこらせ、うごめかして生命を取り戻さねばならなかった。私は詩人達に駆け寄り想像力の学校に入ったのだった(6)。

このエピソードは、あくまで後年、彼自身が語ったものであるため、多少歪曲されている可能性がある。しかし重要なことは、彼が芸術を論じた動機が、芸術に対する関心のみではなかった、ということである。科学が「消毒済み」であるという批判、すなわち科学が取り扱う領域が、我々の経験のごく一部しか扱っていない、という批判から芸術が注目されている。本稿ではベルクソンの時間論に対するバシュラルの曖昧な態度の背後に、ベルクソンの批判に共感する部分があったのではないかと指摘した。そしてこの推察は、このエピソードからも裏打ちされる。バシュラルは科学に対する批判を十分に自覚し、それに同意する部分も持っていたからこそ、芸術という新たな領域を論じ始めた。バシュラルが科学と芸術という二つの領域を平行して論じ続けたのは、決して偶然ではなかったのである。そしてこれは、芸術論の内実にも影響を及ぼす。なぜならこのような経緯から論じられる芸術論は、必然的に科学と反対の性質、科学では扱うことの出来ない「細菌がうようよ」する部分が強調されるからである。しかしこの問題については、また稿を改めて論じることとしたい。

## 参考文献

### Gaston Bachelard

- EA; *Essai sur la connaissance approchée*, Vrin, 1928 (豊田彰・及川穂・片山洋之介訳、『近似的認識試論』、国文社、一九八二年)  
II; *L'intuition de l'instant*, Stock, 1932 (掛下栄一郎訳、『瞬間の直観』、紀伊国屋書店、一九六九年)  
DD; *La dialectique de la durée*, Boivin, 1936 (掛下栄一郎訳、『持続の弁証法』、国文社、一九七六年)  
IPIII; "Instant poétique et instant métaphysique", *messages*, 2, 1939  
PN; *La philosophie du non*, P.U.F., 1940 (中村雄二郎・遠山博雄訳、『否定の哲学』、白水社、一九九八年)  
FPF; *Fragments d'une poétique du feu*, P.U.F., 1988 (本間邦雄訳、『火の詩学』、せりか書房、一九九〇年)  
*Actualité et postérités de Gaston Bachelard*, sur la direction de Pascal Nouvel, P.U.F., 1997

### Henri Bergson

O: *Oeuvres*, édition du centenaire (1959), P.U.F., 1991 (合田正人・平井靖史訳、『意識に直接与えられたものについての試論 時間と自由』ちくま学芸文庫、二〇〇二年)

Luis Althusser

LC: *Lire le capital*, P.U.F., 1965 (今村仁司訳、『資本論を読む』ちくま学芸文庫、一九九六年)

Thomas S. Kuhn

SSR: *The Structure of Scientific Revolution*, The University of Chicago Press, 1962 (中山茂訳、『科学革命の構造』みすず書房、一九六九年)

Alexandre Koyré

MC: *Du monde clos à l'univers infini*, Gallimard, 1973 (野沢協訳、『コスモスの崩壊 閉ざされた世界から無限の宇宙へ』白水社、一九九九年)

Jacques Chevalier

EB: *Entretiens avec Bergson*, Librairie Plon, 1959 (仲沢紀雄訳、『ベルクソンとの対話』みすず書房、一九六九年)

## 註

(1) たとえば次の文章からもそれが確認できる。「認識の発展の現実的歴史は、今日では理性の宗教的勝利への目的論的希望とは全く別の法則に従っているように見える。我々はこの歴史を根本的な不連続性(例えば、新しい科学が以前のイデオロギー形成体の地盤から分離してくるとき)として根底からの手直しを持って刻まれた歴史として把握することから始める。この根底的な手直しは、認識論的領域の存在の連続性を尊重するとしても(必ずしもそうとばかりは言えないが)、切断(*rupture*)のなかで新しい論理の領域を創設するのであり、この新論理は旧論理の単なる発展、「真理」あるいは「転倒」であるどころか、文字通りそれに取って代わるのである。(太字は著者、傍線は橋爪)(LC 45-6) ここでは歴史の「不連続性」や「切断」といった側面が強調されている。

(2) クーンの『科学革命の構造』は一九六二年に、コイレの『コスモスの崩壊 閉ざされた世界から開いた宇宙へ』は一九五七年に出版された。



(3) クーレンは次のように指摘する。「おそらく科学は、個々の発見や発明の累積として発展するものではないのであろう。同時にその同じ科学史家達は過去の観察、信条のうちで、「科学的要素」と先人達が簡単に「誤り」とか「迷信」と名付けていたものを区別することのますますの困難に直面している。例えばアリストテレスの力学とかフロジストンに基づく化学とか、熱素説に基づく熱力学を深く研究すればするほど、かつて流行した自然観が、現在のものより非科学的であったり人間の愚かしさの産物であったりするわけではない、ということを感じるようになる。」(GSR 2)

(4) ベルクソンから大きな影響を受けつつ、しかし科学に対する批判には賛意を示さなかったという点で、バシュラールの立場はホワイトヘッドと共通するところがある。ホワイトヘッドは『過程と實在』において「私はまた、ベルクソン、ウィリアム・ジェイムス、ジョン・デューイにも大いに負うところがある。私が急務と考えたことの一つは、彼らのような型の思想を、当否はともあれ、それらに結び付けられていた反主知主義 (anti-intellectualism) という非難から救い出す、ということだった」と述べている。『過程と實在』上、序ⅩⅩ頁、A・N・ホワイトヘッド著、平林康之訳、みすず書房、一九八一年) しかしバシュラールが留保しつつもベルクソンに反論したのに対し、ホワイトヘッドはベルクソンのなものと科学的なものを両方含んだ新しい哲学を作ることで科学批判に答えようとした点に違いがある。

(5) たとえば、ジャック・シュバリエの著書『ベルクソンとの対話 (Entretiens avec Bergson)』に見られる次のような言葉がそれを示している。「(シュバリエの著作は) 私には過分な名誉だ。しかし唯一であり普遍的である時について、またこの問題に関する私の観点について言うべきことをこれ以上に上手く言い切ることとはできないだろう。バシュラールの著作には多少がっかりさせられた。」(EB 256) 文章の前半でベルクソンは、本の著者であるジャック・シュバリエの論文「De Descartes à Bergson」を取り上げ、それを褒める。ここで注目したいのは、この論文がベルクソンの時間論を扱っていることである。時間という問題に関してベルクソンが、シュバリエの解釈に賛意を示しつつ、バシュラールの著作に「がっかりした」と述べていることが確認できる。

(6) Louis Guillemit, "Bachelard ou l'enseignement du bonheur", p.42, Annales de l'université de paris, 33 année, 1963